

東 諸 富 遺 跡

久留米市草野町吉木字東諸富所在遺跡調査報告

久留米市文化財調査報告書

第 17 集

1 9 7 8

久留米市教育委員会

序

耳納山地の北麓草野町一帯は、市内でも有数の埋蔵文化財包蔵地域であります。おびただしい古墳群や、その間に点在する個性豊かな装飾古墳などは、祖先の息吹きを今日に伝える貴重な文化遺産です。

このたび、弥生時代遺物の散布地草野町東諸富に、公営住宅草野団地が建設されることとなりました。本書はそれに伴う緊急発掘調査の報告であります。耳納山麓では今後も各種の開発事業が予定されています。その際、本書が将来の発掘調査の一指針として、各方面に活用され文化財保護に大いに貢献することを切に望む次第であります。

昭和 53 年 3 月 31 日

久留米市教育委員会教育長

安 元 忠 男

例 言

1. 本書は、久留米市教育委員会が国庫補助を受け、昭和52年度に実施した久留米市草野町東諸富地区の公営住宅建設に伴う、埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 写真は、遺構を萩原裕房・櫻井康治、遺物を櫻井が担当した。
3. 掲載の図面は各調査員作成のものを萩原が製図し、遺物実測は萩原・平塚あけみ、製図は萩原によるものである。
4. 本報告は、Iを櫻井、II・III・IV・Vを萩原、VIを古賀壽、石器については富永直樹が執筆し、萩原が編集した。

目 次

I は じ め に	1
II 遺 跡 の 立 地	4
III 遺 構	5
IV 遺 物	7
V そ の 他 の 遺 物	14
VI お わ り に	18

I は じ め に

東諸富遺跡は、久留米市草野町吉木字東諸富に所在する遺跡である。草野町一帯には、現在小古墳が各所に点在しており、破壊された古墳も数多い。これらは、いくつかの群集をなしていると思われる。このような環境に位置する当該地に、久留米市が公営住宅を建築することになり、事前に分布調査を行なった結果、弥生土器・土師器・須恵器の破片が採集された。よって、久留米市教育委員会は国庫の補助を受け、昭和52年4月23日から同年7月7日まで緊急発掘調査を実施した。調査は、当該地にトレンチを設定し、遺構の検出状況に応じて、随時トレンチを拡張する方法をとった。

調査組織は下記のとおりである。

調査主体	久留米市教育委員会	教育長	安 元 忠 男
	文化担当主幹	大 石	繁 (前任)
	文化財担当主幹	塚 本	直 次
		係長	塚 本 直 次 (兼務)
調査担当者	久留米市教育委員会	文化部文化財担当	萩 原 裕 房 櫻 井 康 治



耳納連山よりの遠景



第1図 周辺遺跡分布図 (承認番号昭53九複、第107号)



第2図 東諸富遺跡周辺地形図 (1/5000)

II 遺 跡 の 立 地

本遺跡は、久留米市草野町大字吉木字東諸富2543の1に所在する。

元来久留米市付近は、筑後川によって形成された豊饒な沖積平野で、古くより筑後平野の中心地となっている。市内東方には、高良山を西端とする耳納連山が連なり、その北側は急傾斜のみごとな断層崖をなし、崖下に発展した崖錐・扇状地とともに、筑後川中流平野の南部を直線的に限っている。この崖錐あるいは扇状地上には多くの遺跡が分布し、特に後期古墳の築造は盛んであった。すなわち、装飾古墳で著名な下馬場古墳、前畑古墳をはじめ、多くの古墳群（吉木古墳群等）が形成されている。もちろん、その間に弥生時代の遺跡も点在している。

今回の調査地点はそうした耳納山麓の一扇状地上に位置し、弥生時代の住居跡1軒が検出された。草野町一帯は、まだまだ開発のテンポがゆるやかで発掘調査箇所は少なく、確認された遺跡も、^{ことはやし}紅桃林遺跡（草野町）や木塚遺跡（善導寺町）など数ヶ所にとどまっている。

また、耳納連山北麓と筑後川の間には条里制が施行され、今日なお整然としたその姿をとどめ、観興寺・永勝寺等古代に起源をもつ寺院も山麓に点在し、古くから発展してきた地域であることを偲ばせる。



第3図 発掘区トレンチ配置図 (1/500)

III 遺 構

発掘は、トレンチ調査の方法をとった。遺構は竪穴式住居跡1軒と数個の柱穴を検出したのみである。以下、土層、住居跡、柱穴を順に説明する。

1. 土 層 (第4図)

各トレンチの土層を観察したが、土層は約4～5層からなる。表土は、もと果樹園であった関係上、かなり攪乱を受けている。表土から地山までの層は主に砂質系で、部分的に礫層がはさまり、全体的には小石を多く含んでいる。これは果樹園開墾の時に上部より切り取った土砂も混在していると思われるが、若干盛土を行なったのであろう。拡張部での地層断面では黒色土及び茶褐色系の土層が見受けられ、小石及び遺物が多く含まれる。また、東端は唐谷に源を発する三光川によって限られ、トレンチAの東半分ほどは、その氾濫による砂礫の堆積が著しい。従って、この部分に遺構の残存は認められない。

現状では、東側と西側に段差がみられるが、地山の傾斜は東側が低く、また北側に行くにしたがい緩やかに低くなる。なお、トレンチ断面に包含層は見受けられなかった。

2. 竪穴住居跡 (第5図, 図版3) SI 1

トレンチA・Bの隅で検出され、一部拡張したが、全貌を明らかにすることはできなかった。1辺約6mで方形プランを呈している。正方形か長方形かは不明であるが、おそらく正方形に近いものと考えられる。壁面の深さは50cm余を測る。

東壁・北壁の近くには、ピットが数個検出されているが、この住居址に伴うものかどうかは不明である。床面中央と思われる所に、径80cm、深さ20cmの円形ピットがあるが、壁面に焼痕は認められず、炉として使用されていたとは思われない。西南隅に、幅1.4m、深さ40cmの土壇状遺構を検出した。屋内貯蔵穴と思われる。その中から、砥石・高坏・甕の3点が出土した。

遺物は、床面に密着して出土したのは数点で、他はほとんど浮いた状態(小石混りの黒色土及び茶褐色土層中)で検出された。住居跡に伴うというよりも、流れ込みによるものと考えられる。

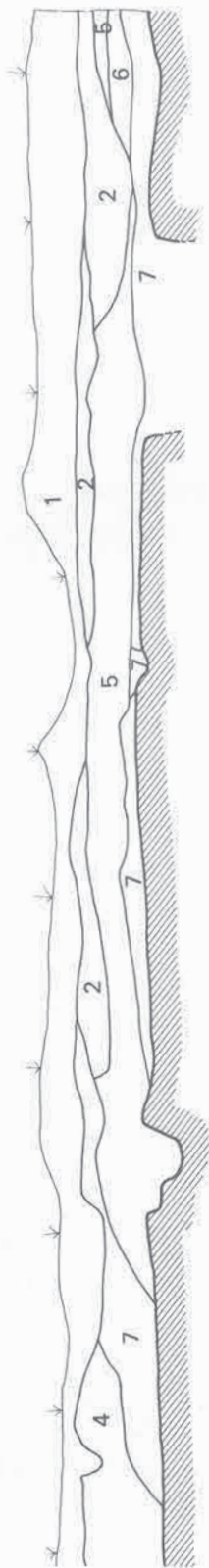
3. 柱 穴 (図版2)

トレンチA・Bのみで確認された。総数14個を数えるが柱穴間の関係は不明である。柱穴の径は約20～60cmで、大きさはまちまちである。深さは約15～45cmで、25cm前後のものが多く、柱穴の形態は、底が平らなもの、底が尖っているものの2種類が認められた。また、柱穴内から遺物等の出土はなかった。

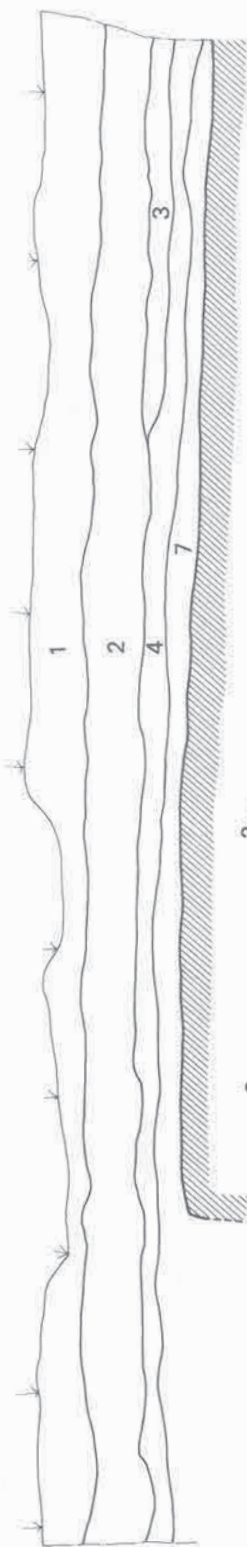


発掘風景

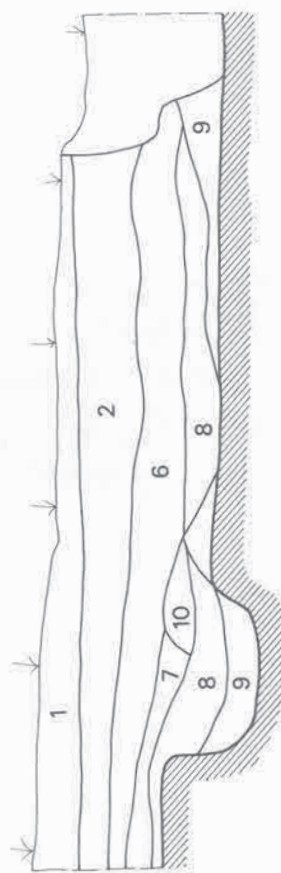
37.50 M



37.50 M

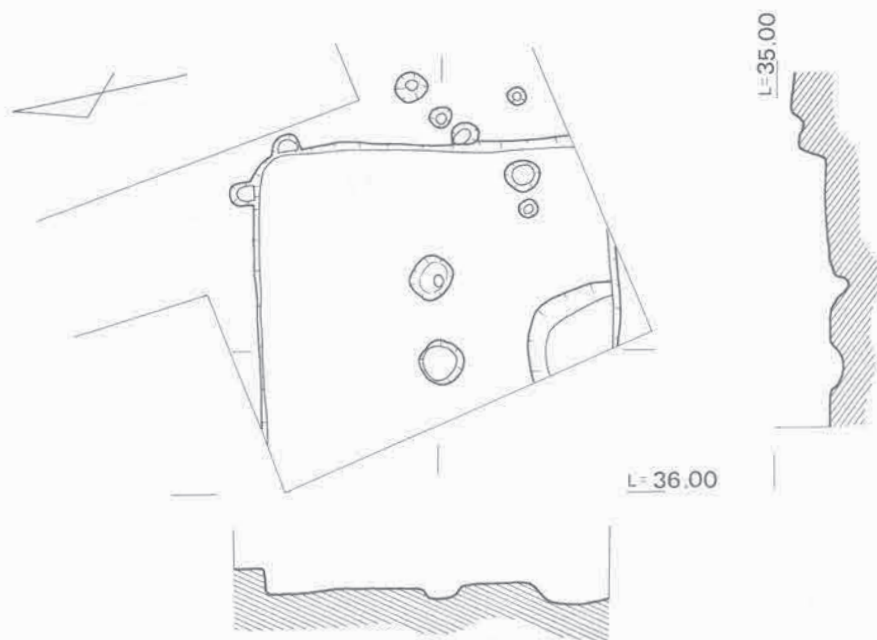


37.50 M



- ① 表土
- ② 茶色土
- ③ 淡茶色砂質土層
- ④ 小礫混入暗褐色砂質土層
- ⑤ 黑褐色土層
- ⑥ 黑色土層
- ⑦ 暗褐色土層
- ⑧ 黑茶褐色土層
- ⑨ 暗茶褐色砂質土層
- ⑩ 暗黃褐色砂質土層

第4図 地層断面実測図 (1/50)



第5図 住居跡実測図 (1/20) SI 1

IV 遺 物

トレンチ調査であったが、遺物はかなり出土した。表土中及び第2・3層に多く含まれており、特に、トレンチA・Bの住居跡側に集中していた。

住居跡上面は礫混入黒色土及び茶褐色土層があり、遺物はその中からも多く検出された。

まず、住居跡内及びその上面より出土の土器から説明する。(図版4～6)

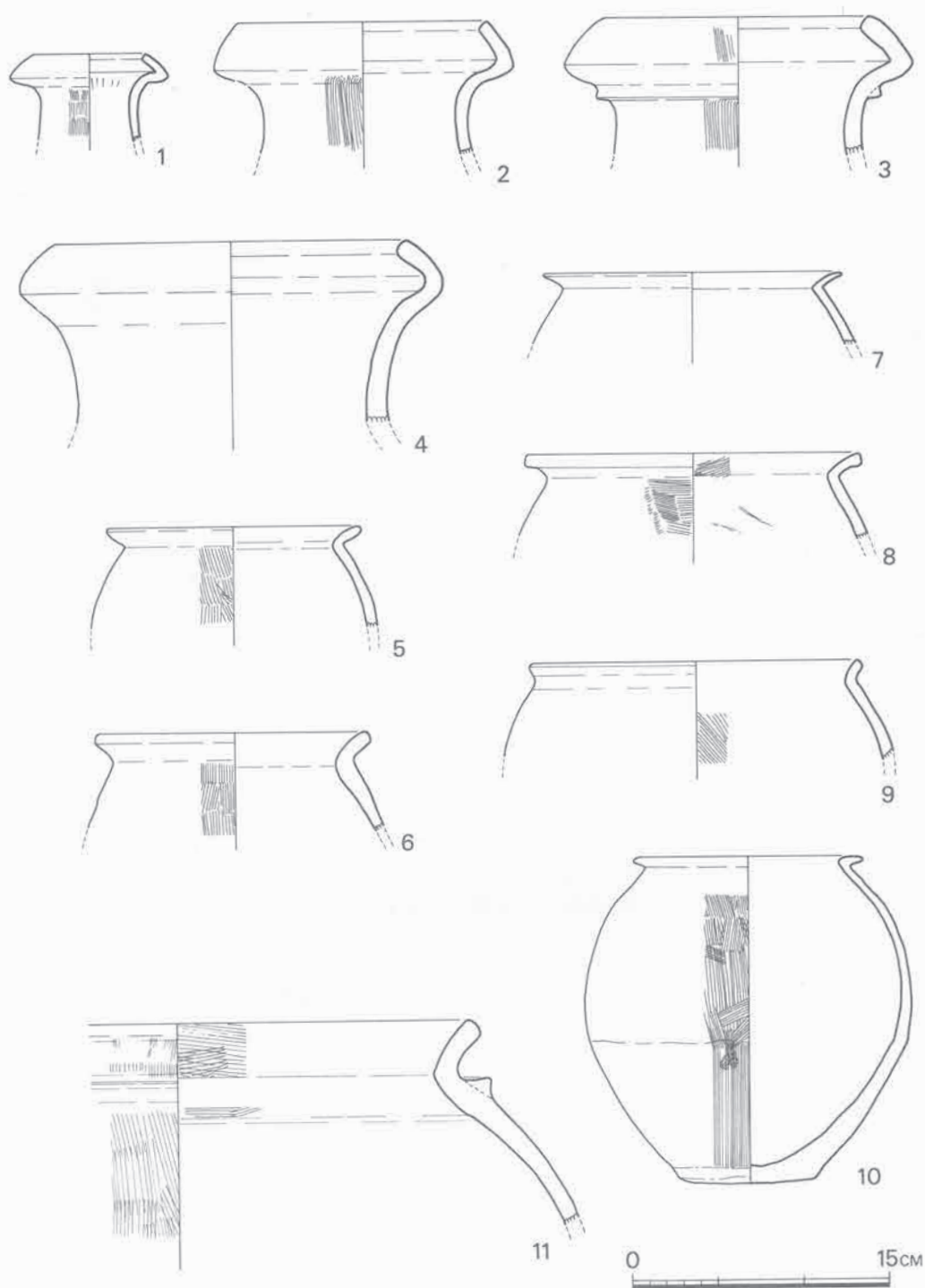
1. 壺 (第6図1～4)

すべて袋状口縁の壺である。4個とも大きさを異にする。1は最小で口径6.6cm、4は最大で口径20.8cmを測る。3は突帯を有し、外面ハケ目調整である。1～3は袋状口縁部に稜線を有するが、4はやや丸味を持っている。時期的にはほぼ同時期のものと思われる。

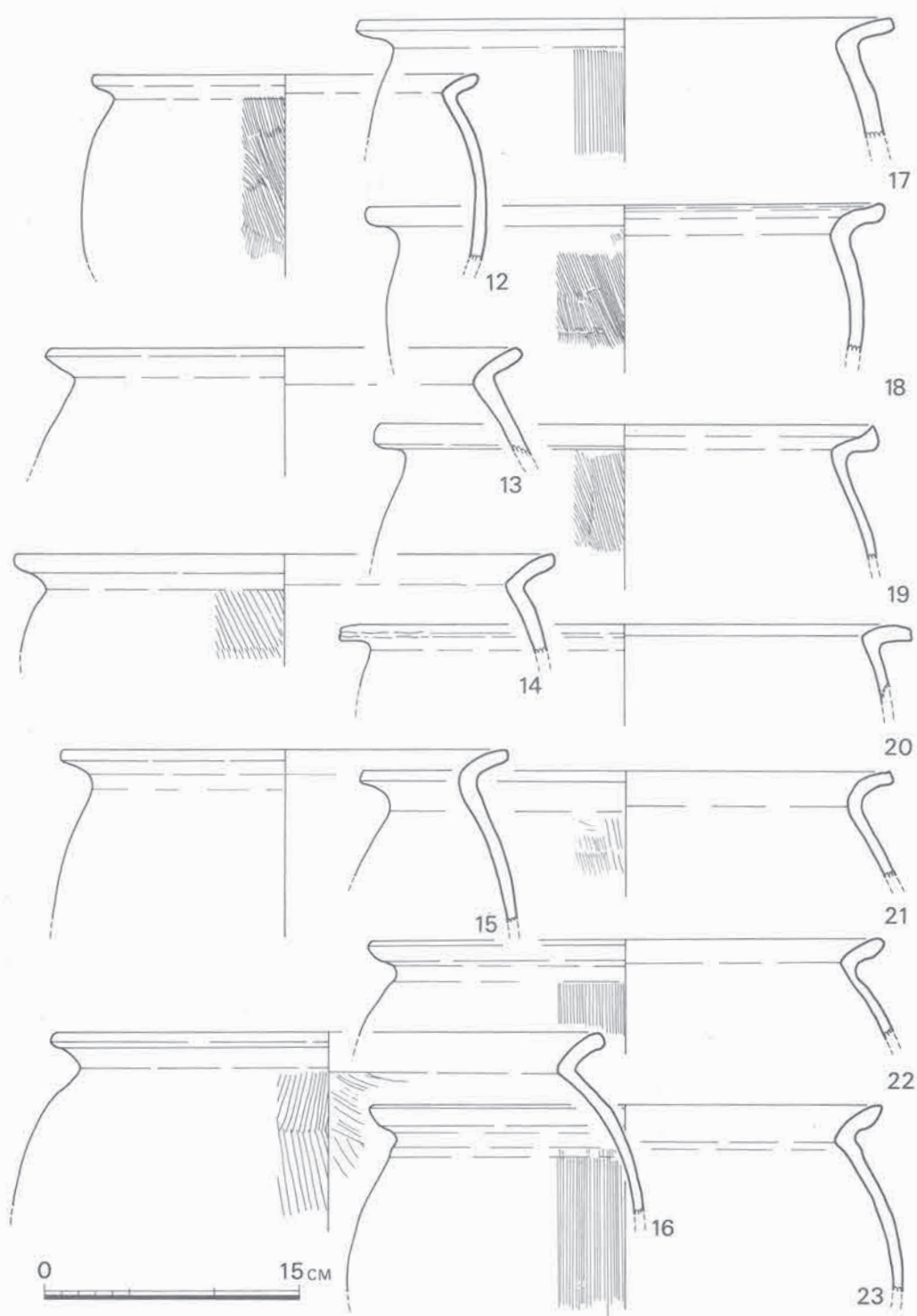
2. 甕 (第6図5～11、第7図12～23)

数多く出土している。5～9は鉢形土器の可能性もあるが、一応甕とした。

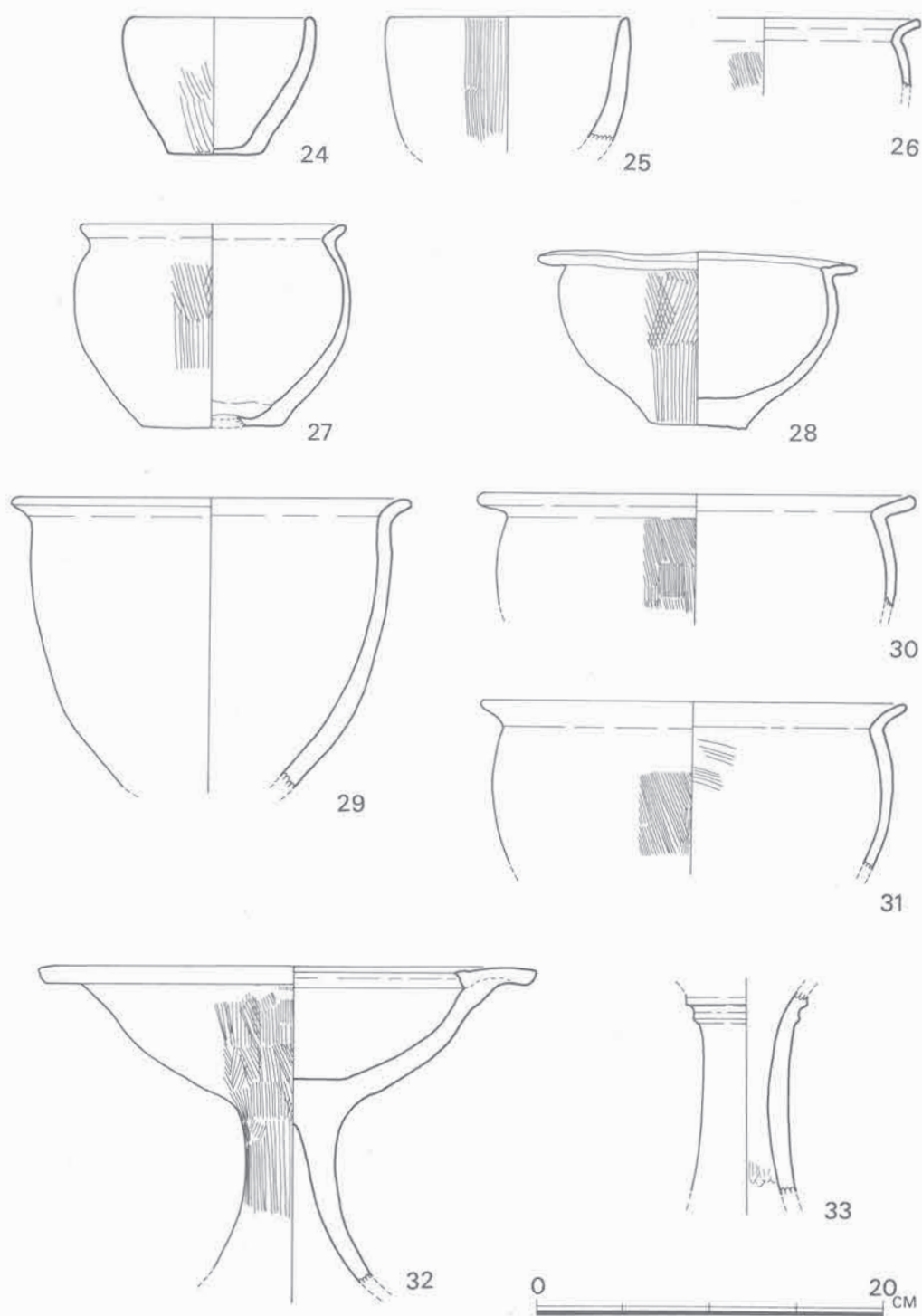
形態はほぼ5類に分けられる。小形のものと中形のものとに大別され、小形は2類に、中形は3類に分けられる。10は、住居跡内の貯蔵穴より出土。11はやや大形になるようで、頸部に突帯が一条めぐる。外面はハケ目調整、内面の口縁部近くはハケ目調整を施す。径約34cmを測る。19の口縁部は、口縁部外面にふくらみを持ち、口縁部先端部は上面に持ち上げられ、やや変わっている。また、20は口縁部内面にふくらみを持たせ、口縁部先端は面取りされ、2条の



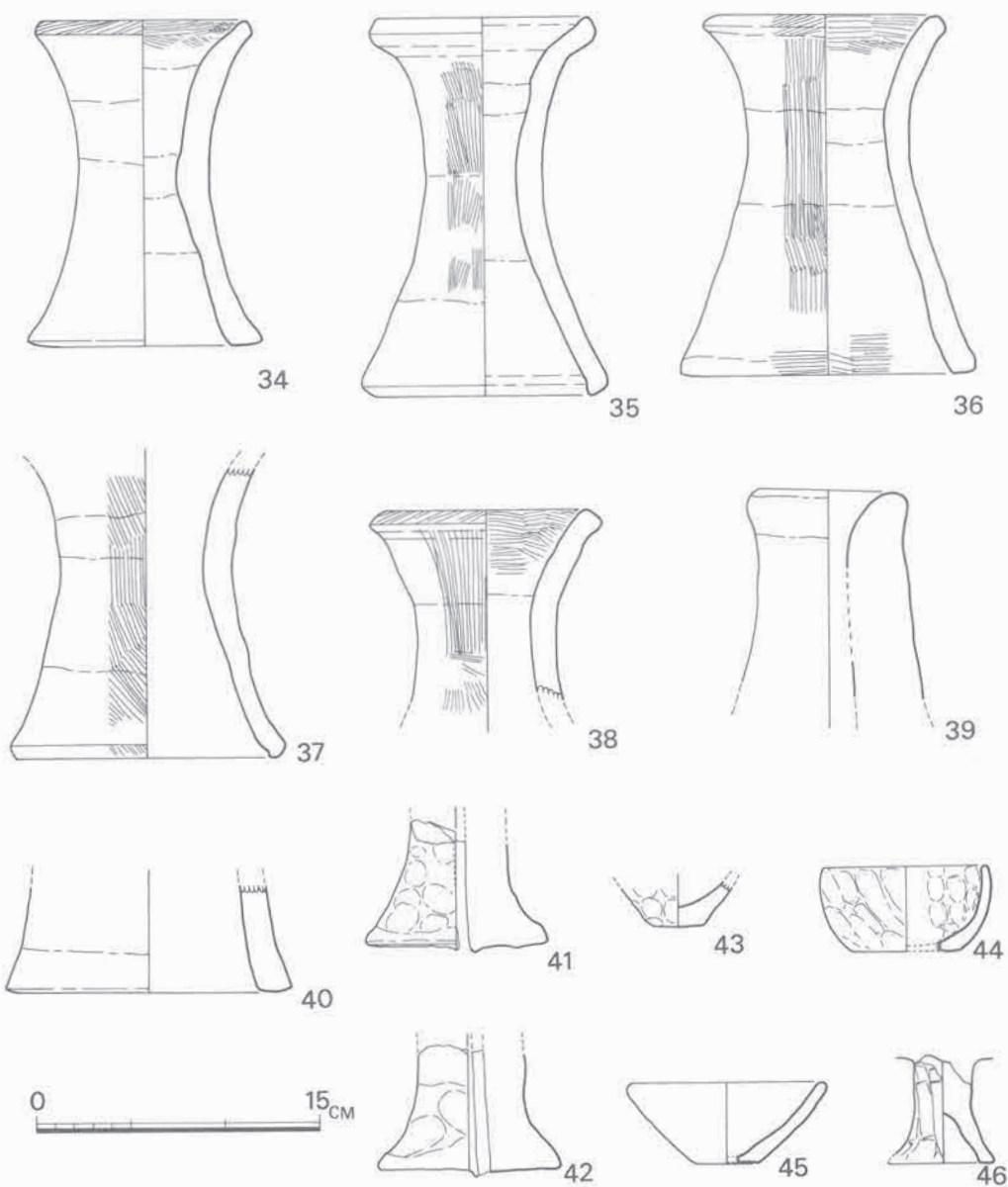
第6図 出土遺物実測図 ① (1/4)



第7図 出土遺物実測図 ② (1/4)



第8図 出土遺物実測図 ③ (1/4)



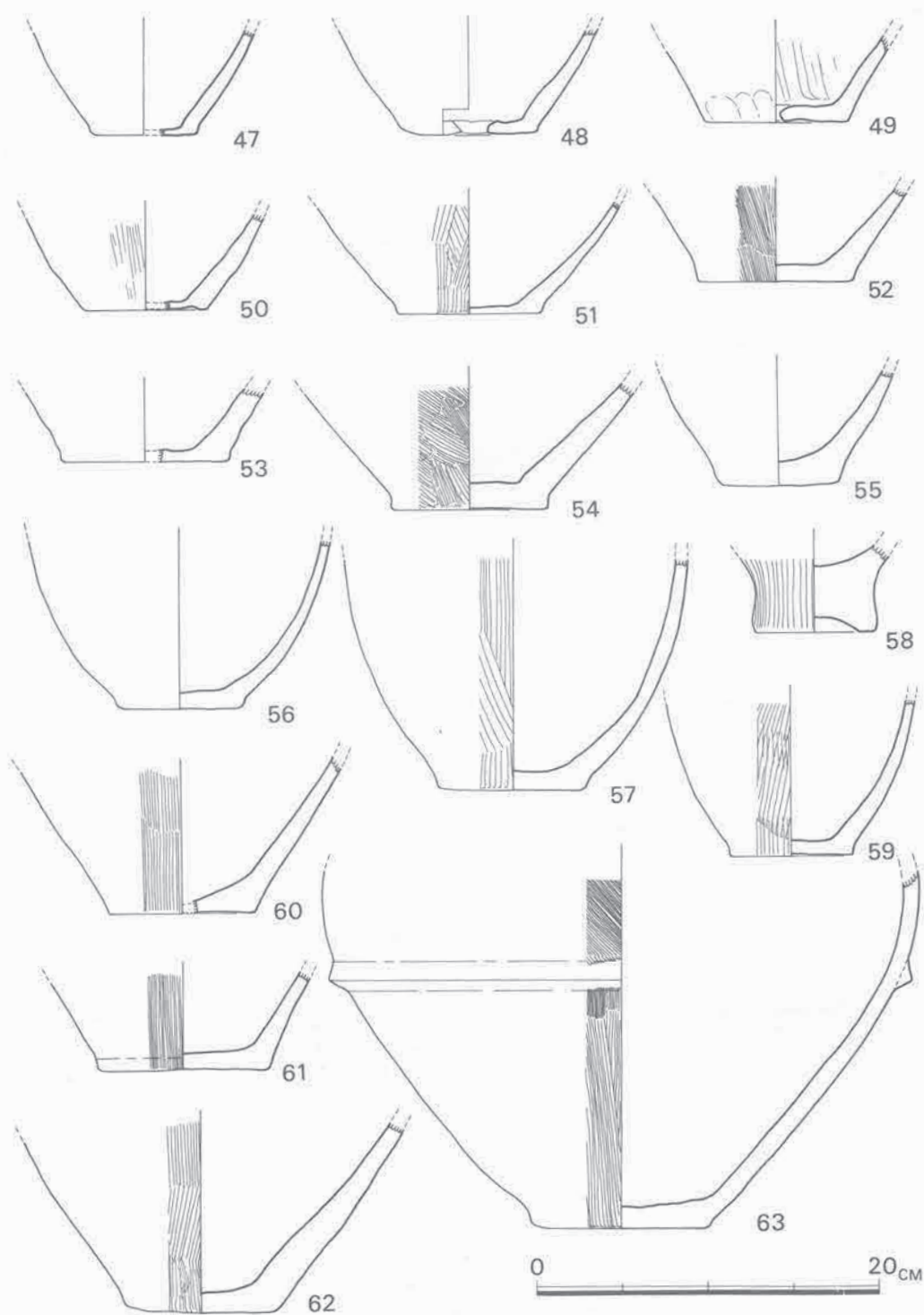
第9図 出土遺物実測図④ (1/4)

不確かな凹線が施されている。

全体的に外面はハケ目調整、内面はナデ調整によっている。

3. 鉢 (第8図 24~31)

ここでは、確実に鉢となるものを取り上げた。口縁部の有無によって2類に大別される。24が25より小形品で、口径約15.5cm、高さ約8cm、底径5.5cmを測る。底部は体部に比べ、極端



第10図 出土遺物実測図 ⑤ (1/4)

に薄くつくられ、約3mm前後である。外面ハケ目調整、内面はナデによる調整が施され、色調は淡褐色を呈す。25は口径約14cmを測る。色調は褐色を呈し、調整は24と同様である。26～28は、口縁部が短く、特に、28は特異な形態である。また、28は脚がつくような感じで、底には不整な面を残している。他はほぼ同形態を示す。

4. 高 坏 (第8図32・33)

数点見受けられる。32は、脚部を一部破損しているがほぼ完形である。住居跡内の貯蔵穴より出土。口径28.8cm、現存高約18cmを測る。坏部は、ゆるやかなふくらみを持ち、口縁部端は丸味を持って終る。底面は平らである。脚部はゆるやかに広がっている。外面はハケ目調整を施し、色調は褐色を呈し、胎土、焼成ともに良い。33は、脚部の一部で、凸帯を2状めぐらしている。色調は赤褐色を呈し、胎土、焼成とも良好である。

5. 器 台 (第9図 34～42)

40～42は支脚と思われる。34～39はほぼ同形を呈すが、35・37は、受部端及び裾部端の形態が他より若干異なる。36は住居跡床面より出土している。34はやや小形で、外面はかなり凹凸がめだち、ハケ目調整でなく、ナデ調整を施している。全体的に外面はハケ目調整を施し、内面は受部あるいは裾部にハケ目調整を施している。34など中期的様相を呈すが、他は後期前半頃のものであろう。

6. 手づくね土器 (第9図 43～46)

45はやや異なるかもしれない。46は、脚部であるが、外面へラ削りされ、ミニチュア品と思われる。

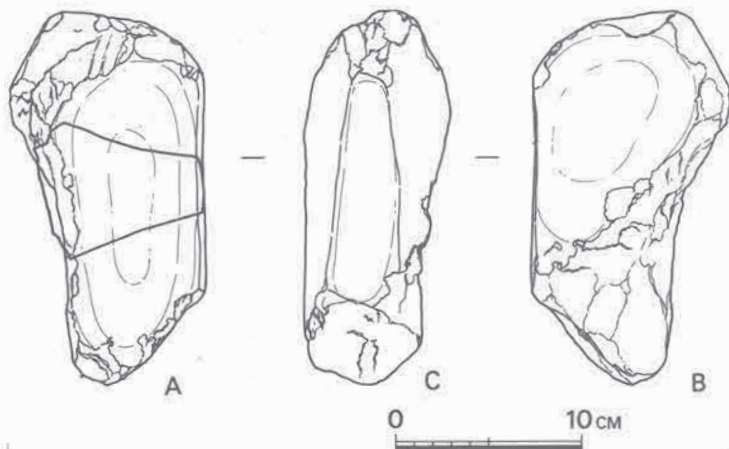
7. 底 部 (第10図)

51・56・57・62・63は壺、47・48・49・50は鉢、他は甕棺の底部と思われる。48・49は底部穿孔を施している。58は、城ノ越式土器の底部で、住居跡上面の黒色土上面より出土している。

時期としては、中期～後期まで含まれているが、主に中期後半から後期前半頃に集中している。

8. 砥 石 (第11図)

竪穴住居跡内の貯蔵穴底面付近から高坏(第8図32)・甕形土器(第6図10)と共に出



第11図 砥石実測図(1/4)

土。表裏両面（AB）と長軸右側面（C）の3面が使用され、表面は特に著しく、断面でわかるようにゆるやかな凹状をなしている。その他、表面の上部に数条の砥ぎ面が看取され、幅の狭いものを対象としている。砥面以外は、敲打や打剝によって粗く整形されている。長さ20cm、幅10.5cm、厚さ7.3cmを測る。仕上げ用砥石で、上質の乳白色を呈する天草石を利用している。出土土器から、弥生後期前半に比定して大過ないものと思われる。

以上、竪穴及び礫混入黒色土と、茶褐色土中出土の土器を観てきたが、黒色土中出土の土器には、時期的に差がある土器が混入しており、前記のように、やはり流れ込みによる遺物の堆積と考えられよう。確実にこの住居跡に伴うものとしては数点（10・32・36等）が上げられる。

それらの土器をみるかぎり、中期的要素を持ちながらも、やはり後期に入るものと考えられる。それも前半頃に比定できよう。他の土器は、中期前半～後期の時期のものである。

よって、この住居跡の時期は後期前半の所産と考えて大過ないであろう。

V その他の遺物

表土及び第2・3層出土の遺物数点を図示した。弥生土器の出土がもっとも多いが、須恵器・土師器の破片も出土している。

1. 弥生土器 （第12図、図版7）

壺・甕・鉢・器台・高坏等の器形がある。甕が主で、それも小形のものが多い。大形のものはわずかである。次いで鉢・器台がやや多く、壺・高坏等はごく少量しか出土していない。弥生前期に比定できる土器の出土は1点もなく、中期～後期のものに限られている。中期でもほとんどがその後半から後期に入るものであった。1は口径16.1cmで、口縁先端に刻目を持ち、口縁部上面をわずかに凹ませている。中期前半の所産であろう。2～6は甕、7は壺、8はやや大ぶりの鉢である。

また、手づくね土器も若干出土している。

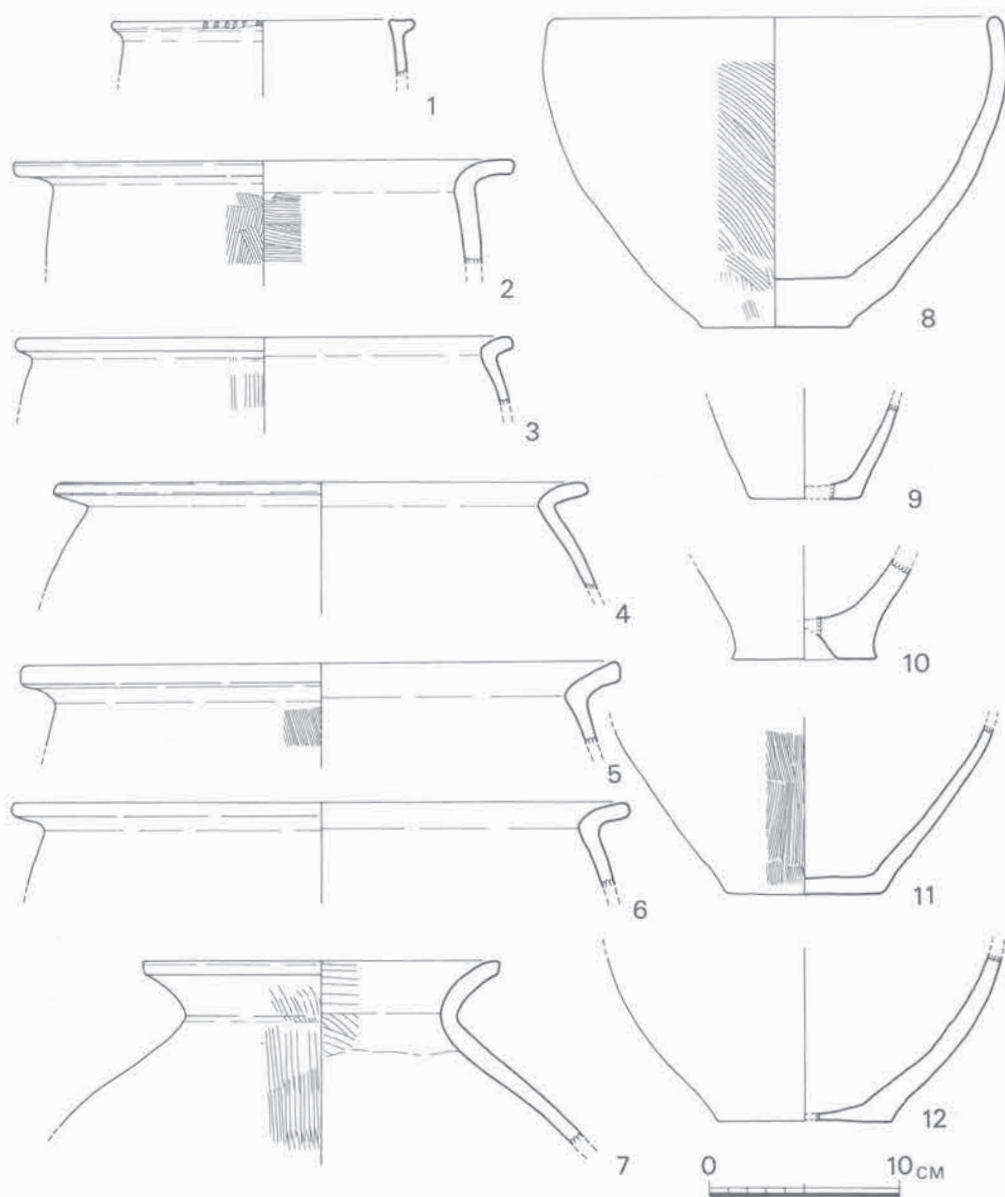
2. 須恵器 （第13図1～10・第14図29・30、図版7・9）

量的にそれほど多くはない。坏蓋・坏身・壺・甕等の出土をみたが、坏が主であった。坏蓋は、退化した宝珠形つまみを有するもの（1・2）、蛇の目のつまみを有するもの（3）とがみられる。坏身は高台を有し、断面台形を呈するもの（6・7）や丸味を有するもの（8・7）とがみられる。10は他とやや異なった高台である。いずれにせよ、時期的にはほぼ奈良後半から平安初期にかけてのものと思われる。壺（29）・甕（30）等も同時期のものと考えてよいだろう。

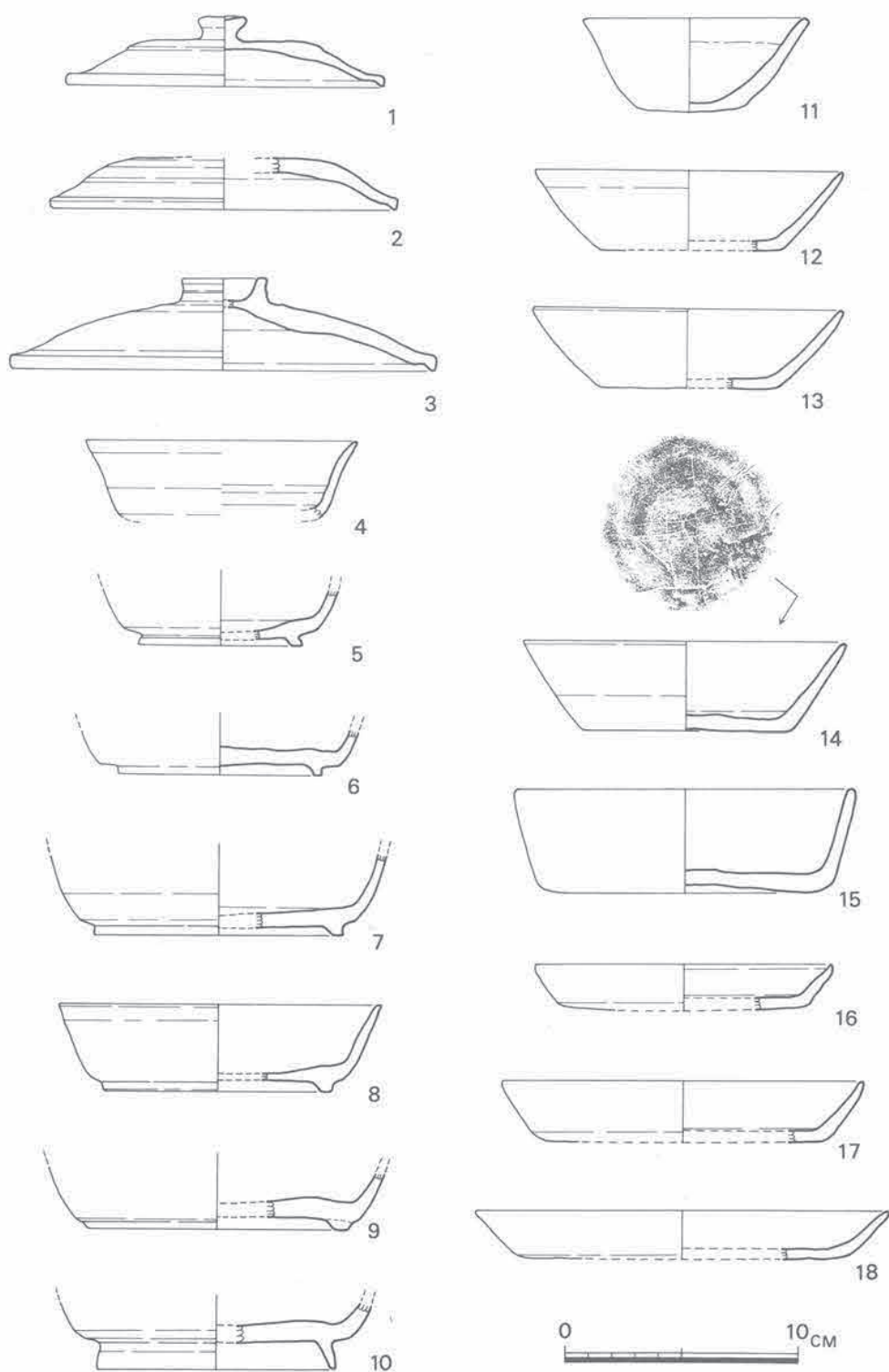
3. 土師器 （第13図11～18・第14図19～28、図版8・9）

坏・碗・皿・甕・鉢等が出土しているが、坏・皿類が主であった。11は口径9.7cmで小形の

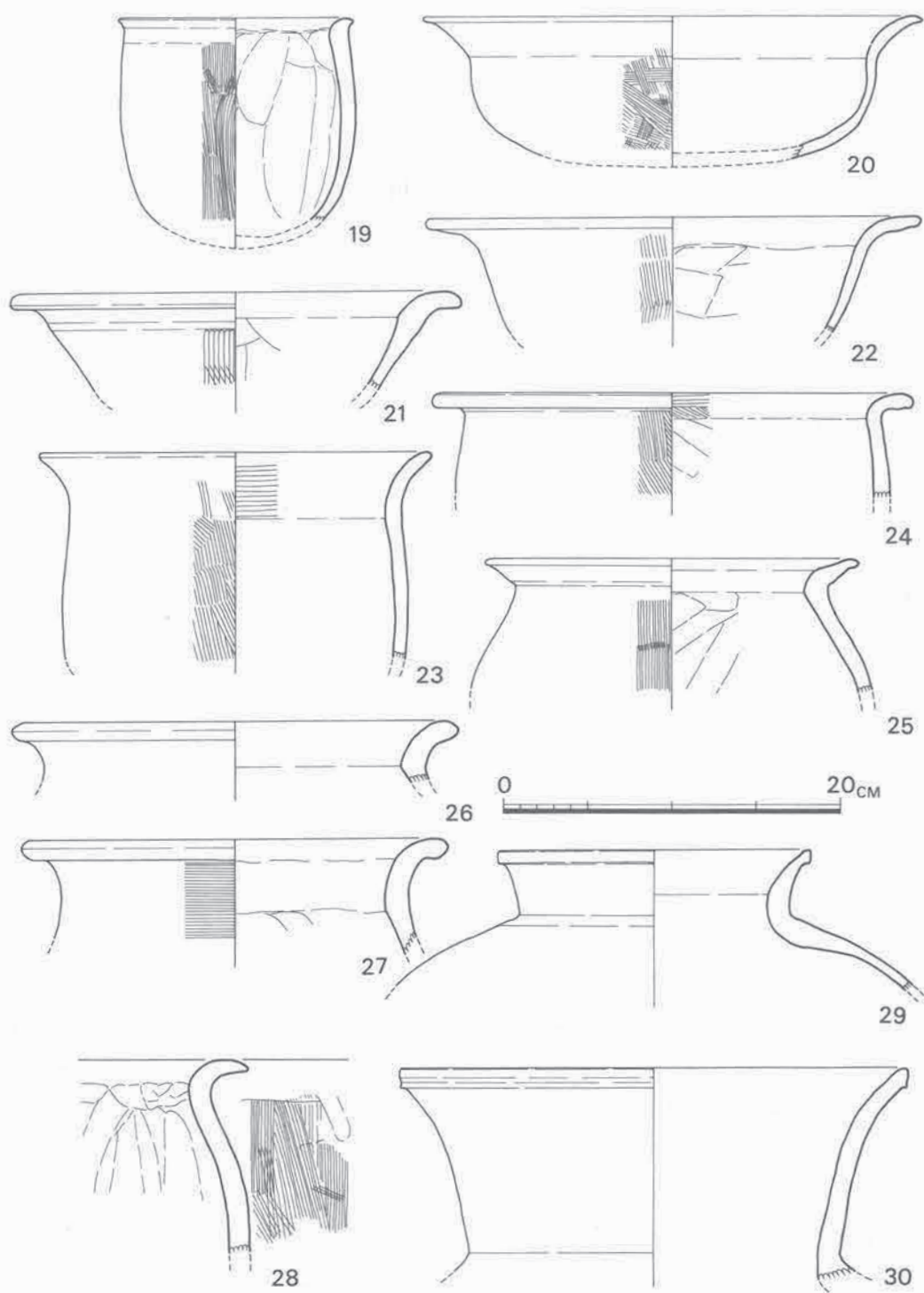
碗と思われる。14の口径13.8cm、高さ 3.8cmを測るが、見込みには針書きで井形の陰刻が施されている。皿は、最大径18cm前後で盤といわれるものは出土しなかった。須恵器と同じく奈良後期～平安初期にかけてのものと思われる。20は、口径29.8cm、推定高約9cmを測り、体部は丸味をおび全体的に薄手である。21・22よりもやや時期的に新しいと思われる。



第12図 表土出土弥生土器実測図 (1/4)



第13図 表土出土須恵器 (1~10)・土師器 (11~18)



第14図 表土出土土師器 (19~28)・須恵器 (29・30) 実測図 (1/4)

VI む す び

すでに述べたとおり、本遺跡は耳納山地北麓の扇状地上に立地する弥生時代遺跡であるが、今回の調査地点は河川の氾濫によって旧状を失なった部分が多く、遺構としては竪穴住居跡1軒と、若干のピットを検出したに留まった。出土遺物も細片が多く、復原可能のものに乏しい。遺跡の拡がりから見ても、中心部を外れていることは確かなようである。

竪穴住居跡は1辺約6mの方形プランと推定され、屋内に貯蔵穴を備えながら炉を持たず、これに伴う柱穴も明瞭でない。床面出土の土器は、弥生時代後期前半に位置づけられるものであった。

各トレンチ出土の弥生土器は相当量にのぼるが、その殆んどは表土層・包含層中より流れ込みの状態出土したもので、中期前半～後期に及ぶ各型式が混在している。しかし、これらは本遺跡における弥生時代集落の存続期間を明示するものとして、かつ報告例の少ない耳納山地北麓の弥生土器資料として価値を有するものである。よって、可能な限り多くの実測図を掲げ、紹介を試みた次第である。

中でも口唇部外面に貼付文を有する壺形土器の細片（図版7）は、瀬戸内地方の影響を強く受けたものとして注目される。今後の調査により、更に良好な資料に恵まれることを期待したい。

なお付言すべきは、表土層中から流れ込みの状態ながら、奈良時代後期に比定される土師器・須恵器が出土していることである。耳納山地の北麓、筑後川河南の沖積平野には、整然たる条里制遺構の残存が認められるが、班田農民の集落や、その生活の実態などについては殆んど解明されていない。本遺跡は旧山本郡の東部に位置するが、『倭名類聚鈔』によれば、山本郡に「土師」「蒲田」「古見」「三重」「芝沢」の5郷名が記載されている。本遺跡付近に奈良時代の集落跡が存在するならば、そのいずれかをこの一帯に比定することも可能となろう。

また、本遺跡のすぐ北を東一西に通ずる旧街道（いわゆる「山辺往還」）は、筑後国府を起点とし、耳納山地北麓を東走して御井・山本・竹野・生葉各郡衙を点綴、豊後国に至る律令制下の準官道（支路）を踏襲したものと推定される。山本郡衙については未だ成案を得ないが、私見を以てすれば現久留米市山本町豊田付近であろうか。草野町周辺ではこれまで奈良時代遺物の出土は知られていなかったのである。条里制・支路との関係、遺跡の性格などについては将来の調査に俟つ外ないが、いずれにしても興味深いことである。

これを要するに、本遺跡の調査は一見乏しい成果の中にも、従来不明確であった草野町一帯の弥生・奈良両時代遺跡の解明に、1つの手懸りを与えたものとして意義づけることができるであろう。

圖

版



1. 遺跡遠景（北より）



2. 遺跡近景（北より）

図版2



1. トレンチA



2. トレンチB



3. トレンチD



4. トレンチC



1. 竪穴住居（礫石流入の状態）



2. 竪穴住居跡（北より）

図版 4





1



2



3



4



5



6

図版6





1



2



3



4



5



6



7



8



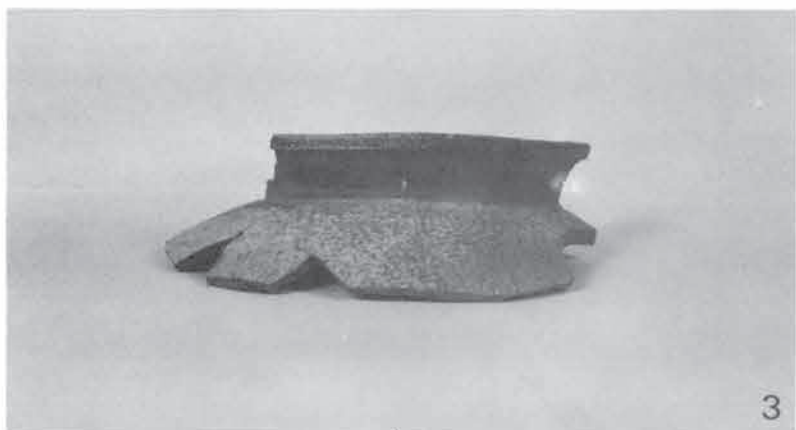
9

表土及び2, 3層出土の土器① (1~5 弥生、6~9 須恵)

図版 8



表土及び2・3層出土の土器 ② (土師器)



表土及び2・3層出土の土器 ③ (1・2土師、3須恵)

久留米市文化財調査報告書 第17集

昭和53年3月31日

発行 久留米市教育委員会

久留米市城南町15-3

印刷 (有) 猪飼プリント

久留米市東和町6の18

